⑵　すけとうだらの動向

我が国周辺水域のすけとうだらは、北海道周辺及び東北沿岸に分布しており、分布域によって太平洋北部に分布する太平洋系群、日本海北部に分布する日本海北部系群、オホーツク海に分布するオホーツク海南部及び根室海峡に産卵場を有する根室海峡の４つの評価単位に分かれている。

この中で最も資源の大きな太平洋系群は、2005、2007年級群が卓越年級群となったが、2010、2011年級群の加入状況は悪かった。2016年の資源量は84.8万トンであり、２歳以上の資源量から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）の２歳以上の資源量の推移から動向は減少と判断される。日本海北部系群は、2006年級群の加入状況は良かったものの、その後の加入状況が悪く、2016年漁期の資源量は8.8万トンであり、親魚量から資源水準は低位、過去５年間（2012～2016年）の親魚量の推移から動向は横ばいと判断される。ただし、2012年級群の加入状況は良く、今後資源量の増加が見込まれる。オホーツク海南部は、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）から資源水準は中位、その過去５年間（2012年～2016年）の推移から動向は減少と判断される。根室海峡は、刺し網漁業のＣＰＵＥ（１隻１日当たりの漁獲量）から資源水準は低位、その過去５年間（2012～2016年）の推移から動向は減少と判断される。

⑶　まあじの動向

我が国周辺水域のまあじは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別されるが、当該資源の分布域は資源状況により大きく異なり、両系群は一部水域において混在して分布している。

太平洋系群の2016年の資源量は4.0万トンであり、親魚量から資源水準は低位、過去５年間（2012～2016年）の親魚量の推移から動向は減少と判断される。対馬暖流系群の2016年の資源量は46.5万トンであり、親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）の親魚量の推移から動向は増加と判断される。

当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きく、特に太平洋系群は加入量が減少していることから、資源動向について注視する必要がある。

⑷　まいわしの動向

我が国周辺水域のまいわしは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別される。当該資源は、これまで数十年単位で大きく変動してきており、その資源状況によって分布域が大きく変化することが知られている。両系群とも1988年から1989年を境として漁獲量が大幅に減少し、近年は低い水準で推移してきた。

太平洋系群は、2008年以降、比較的加入状況が良く、2016年の資源量は211.7万トンで、資源量と親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。対馬暖流系群は、2016年の資源量は29.3万トンで、親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。

当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑸　まさば及びごまさばの動向

我が国周辺水域のまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群に、また、ごまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と主に東シナ海に分布する東シナ海系群に大別され、それぞれ両系群は一部水域において混在して分布している。全般としては、ごまさばは、まさばに比べ南方域に分布しているが、近年、太平洋では北海道沖合まで分布が見られている。

まさば太平洋系群は、2004年、2007年、2009年、2013年に豊度の高い加入があり、2015年の資源量は135万トンである。親魚量から資源水準は中位と判断され、また、過去５年間（2011年～2015年）の資源量と親魚量の推移から動向は増加と判断されるが、北西太平洋公海での外国漁船による採捕の影響も懸念されることから、その動向には注意が必要である。まさば対馬暖流系群の2015年の資源量は77万トンで、親魚量から資源水準は低位、過去５年間（2011年～2015年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。ごまさば太平洋系群の2015年の資源量は44万トンで、漁獲量と資源量から資源水準は高位、過去５年間（2011年～2015年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。ごまさば東シナ海系群の2015年の資源量は10万トンで、親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2011年～2015年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。

まさば及びごまさばは、共に新規加入群の状況によって変動が大きいことから、資源動向について今後とも注視する必要がある。

⑹　するめいかの動向

我が国周辺水域のするめいかは、日本近海に広く分布し、季節により南北に大きく回遊するが、主に12月～３月に東シナ海で発生する冬季発生系群と、10月～12月に北陸沿岸域から東シナ海で発生する秋季発生系群とに大別される。

冬季発生系群の2016年の資源量は33.4万トンであり、資源尾数から資源水準は低位、過去５年間（2012年～2016年）の資源尾数の推移から動向は減少と判断される。秋季発生系群の2016年の資源量は90.6万トンであった。資源量から資源水準は中位、過去５年間（2012年～2016年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。

当該資源は、海洋環境によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑺　ずわいがにの動向

我が国周辺水域のずわいがには、日本海大陸棚の縁辺部、大和堆、銚子以北の太平洋岸及びオホーツク海の水深100ｍ～750ｍの範囲に分布し、生息域の分布によって、オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。

この中で最も資源の大きな日本海系群は、富山県以西（Ａ海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、2017年の資源量は21.3千トンであった。また、沖合底びき網による資源密度指数から、資源水準は中位、過去５年間（2013～2017年）の資源量の推移から、動向は横ばいと判断される。新潟県以北（Ｂ海域）では、2016年の資源量は3.3千トンであり、沖合底びき網および小型底びき網による資源密度指数の５年移動平均から資源水準は高位、過去５年間（2012～2016年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。また、オホーツク海系群は、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）から資源水準は中位、過去５年間（2013～2017年）の調査船調査による分布密度の推移から動向は減少と判断される。また、太平洋北部系群は、2016年の資源量は、626トンであり、資源量から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。また、北海道西部系群は、ずわいがにかご漁業のＣＰＵＥ（１かご当たりの漁獲量）から資源水準は中位、過去５年間（2012～2016年）のＣＰＵＥの推移から動向は横ばいであると判断される。

２　第２種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　日本海西部海域のあかがれいの動向

日本海西部海域（石川県以西）のあかがれいは、当該海域の水深150メートル～900メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のあかがれいの漁獲量は、1990年代前半から増加して2000年前後は3,000トン前後であったが、2006年頃から再び増加し、2007年以降は5,000トン台で推移している。2016年の漁獲量は4,377トンであった。2016年の沖合底びき網漁業の資源密度指数により、資源水準は中位、過去５年間（2012年～2016年）の沖合底びき網漁業の資源密度指数の推移から動向は横ばいと判断される。

⑵　宗谷海峡海域のいかなごの動向

宗谷海峡海域のいかなごは、当該海域の水深40メートル～80メートルに分布している。当該海域の近年のいかなご類の漁獲量は1995年の5.6万トンをピークに減少傾向にある。2016年の漁獲量は、1980年以降で最低となる2014年（443トン）から大きく増加し、4,196トンであった。

過去５年（2012年～2016年）の沖合底びき網漁業の標準化ＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の推移から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。